

米国ランバス一家と蘇州大学

澤 谷 敏 行

今、なぜ蘇州大学で日本語教師をしているかと尋ねられると、長くなるのでショートカットで話すが、実は 1993 年から 96 年まで、関西学院に在職しながら、蘇州大学大学院で中国現代文学を勉強したからである。蘇州大学から碩士（修士）をいただいた。その恩師がまだ健在だったので恩返しにと思い、定年退職した 1 年後からボランティアとして、日本語専攻の院生対象に「日本語論文の書き方」を教えている。友人から、「あなたの日本語が怪しいのによく教えられるね」と言われるが、それでも中国語が役に立っているようで、3 年間続いている。一回の滞在期間は 3 ヶ月である。はじめは 3 年ぐらいでいいのではと思っていたが、やってみるとこんな面白い仕事を手放すのはもったいないという気持ちが湧いてきて、これからも続けるつもりでいる。

さて、その蘇州大学と関学は協定校であるのだが、その経緯があまり知られていない。そこで、協定の経緯とキャンパスに残るランバスゆかりの人々や歴史的な建造物を紹介しようと考えた。

★1982 年関学代表団の訪問 ～ 関学と中国の関係 ～

関学と中国の大学との関係は、1982 年の吉林大学との交流協定によって始まった。蘇州大学を初めて訪問したのは、1982 年 6 月に城崎進学長を団長とする院長、学部長ほか関学代表団 13 名が中国東北部長春（旧満州新京）にある吉林大学を訪問し、友好交流協定の調印を済ませた帰りであった。中国との交流は、当時学内に異議を唱える人もあり、大変慎重に進められた。一行は上海経由で蘇州大学を訪問した。筆者は大学事務室（現在の学長室）から荷物持ちとして同行させていただいた。筆者は中国語の学習経験が全くなかった。実は、蘇州大学が目的ではなく、関学創立者ランバス博士の故地、上海と蘇州にある病院を訪問した。それは、私の記憶では蘇州大学のすぐ前にあった。現在は、蘇州大学の西門を出てまっすぐ行ったらところにある大きな病院だと思われる。



蘇州大学前の病院での記念撮影
久山康院長（後列右から 4 人目）、城崎進学長（同 5 人目）。
院長の右後方に柘植一雄教務部長。前列左端に筆者。



病院の看板

★1985 年自動車部創部 50 周年中国旅行 ～ 2 度目の訪問 ～

次に蘇州大学を訪問したのは、1985 年である。関学自動車部創部 50 周年記念で、新谷隆一教授を団長とした学生部員（15 名）と OB（1 名）ほかが中国大陆を自動車で縦走した時であった。遠征というと、言葉が中国語で悪い意味に取られるので、中国旅行とした（中国語の「遠征」は軍隊のみが使用する言葉である）。ちょうど神戸から上海まで、フェリー「鑑真号」（元阪九フェリーの船）が運航を開始した夏休みであった。4 台の車を運転して、上海から南京、そして西宮市と友好都市である杭州の紹興市を経て、

上海に戻った。筆者も通訳として同行させていただいた。実は、筆者はその前に吉林大学に1年間留学して少し中国語ができるようになっていた。自動車部OBと加藤誠之氏（1930年高等商業学部卒業、元トヨタ自動車販売株式会社社長、当時トヨタ自動車株式会社相談役、後に関西学院理事長）にお願いし、寄付して頂いた乗用車2台を上海市に、マイクロバス1台を紹興市に寄付することになっていた。当時、中国で自動車は大変な高級品であったこともあって、盛大な歓迎会が上海でも紹興でも開催された。上海市長は、のちの国家主席となった江沢民氏であった。上海から無錫に向かう途中、ランバス博士の建てた病院があるということで蘇州大学にも立ち寄った。正門の前まで行ったが、中に入ることはできなかった記憶がある。



自動車部メンバー（上海にて）と
走破した自動車

★院長の訪問（1988年）と学長の訪問（1990年） ～ 学院と大学による交流推進 ～

1988年、久山康院長と関学の卓球部OBで元プロ卓球選手の小山藤兵衛さん（1941年商経学部卒業）に同行し、蘇州大学を訪問した。その頃はピンポン外交が行われていた時代で、小山さんの蘇州訪問は数十回におよび、関学与蘇州大学との仲を取り持ってください。関学与蘇州大学の関係は、ランバス一家と縁が深いというだけで、まだぼんやりとしていた。それで、学院として久山院長が積極的に交流を進められた。

久山院長とその関係者が中国を視察した際、上海に立ち寄り、蘇州大学訪問を計画された。当時、筆者は国際センターに勤務しており、学長からの命を受け、上海で合流した。その時、初めて小山さんから蘇州大学外事処の陳鈺屏副処長を紹介された。陳さんは英語が堪能で柔和な女性だった。元蘇州市人民政府の役人で、蘇州大学の海外交流の責任者であった。筆者は、陳さんに学長の意向を説明し、吉林大学との友好交流協定書を参考に手渡し、協定書の草案作成を依頼した。翌年の1989年6月に天安門事件が発生し、訪問は難しくなったが、手紙は頻繁にやり取りできて、協定書が出来上がった。

翌90年7月に柘植一雄学長一行が表敬訪問し、姜礼尚学長と会談が行われた。協定書に書かれた通り、両大学の最高決議機関の承認を経て、両大学学長が署名し、1990年11月に正式に協定締結された。吉林大学の時のような協定調印式は行われず、書簡が両国を往復し、処理された。



柘植一雄学長と姜礼尚学長



柘植一雄学長、金子精次常任理事（左から2人目）、船本弘毅国際交流部長（左端）の各教授と姜礼尚学長。通訳は若き日の筆者（中央）。3先生は鬼籍に入られている。

★関西学院と蘇州大学 ～ ランバス一家を介しての関係 ～

1989年に蘇州大学工学系の周桑漪教授が関学に来られた際、ある文書を持参された。それは蘇州大学歴史学部張夢白教授が調査された「米国ランバス一家と蘇州東呉大学および日本関西学院の関係」（1989年4月24日）であった。そこで、私の方で翻訳して学院秘書室に届けた記憶がある。

その文書によれば、本学の創立者ウォルター・ラッセル・ランバス（Walter Russell Lambuth、以下ランバス）の妹ノラ（Nora）の夫である医師ウィリアム・パーク（William H. Park、以下パーク博士）は、蘇州に45年間滞在し、ランバスの建てた病院を営み、東呉大学の創立に尽力した。ランバスは、その後1886年に父母とともに日本に伝道と学校建設に行き、関西学院を創立した。米国に帰国したのち、南メソヂスト監督教会の極東地区 General Secretary の役職についた。そして、1900年に蘇州の東呉大学（英語名 Soochow University）の大学登録を自ら米国のテネシー州に申請した。1900年11月に東呉大学は認可されたとある。したがって、ランバス一家、すなわちランバスと妹の夫パーク博士が蘇州大学の前身である東呉大学の創立に強く関わっているのである。



W. R. ランバス
中国名：藍華德

★蘇州市の蘇州大学と台北市の東呉大学の沿革

東呉大学は、1900年に蘇州で創立され、その後1952年まで蘇州に存在し、1954年に台湾で復校された。ただし、当時の建物や100年を越す樹木は、現在の蘇州大学キャンパスに残り、国の文化財として保護されている。

1948年（民国37年）設置の旧東呉大学正門には、スクールモットー「養天地正気 法古今完人」（英語で“Unto a Full Grown Man”）が書かれており、この言葉は、中国蘇州市の蘇州大学でも、台湾台北市の東呉大学でも、現在も使用されている。東呉大学創立に最も深く関わったランバスの妹ノラの末裔は、英語教員として長年蘇州大学で教鞭をとり、今も蘇州大学を時々訪問していると聞く。

1900年当時、東呉大学であったが、英語では Soochow University が使われていた。その理由は、蘇州大学の元国際合作交流処副処長の陸恵星さんによると、当時から地名は蘇州で、その発音がスーチョウなので、外国人の間で Soochow University と呼ばれたからだという。大学名である東呉の表記音を使用するならば、東呉大学は英語では Dong Wu University となるところである。

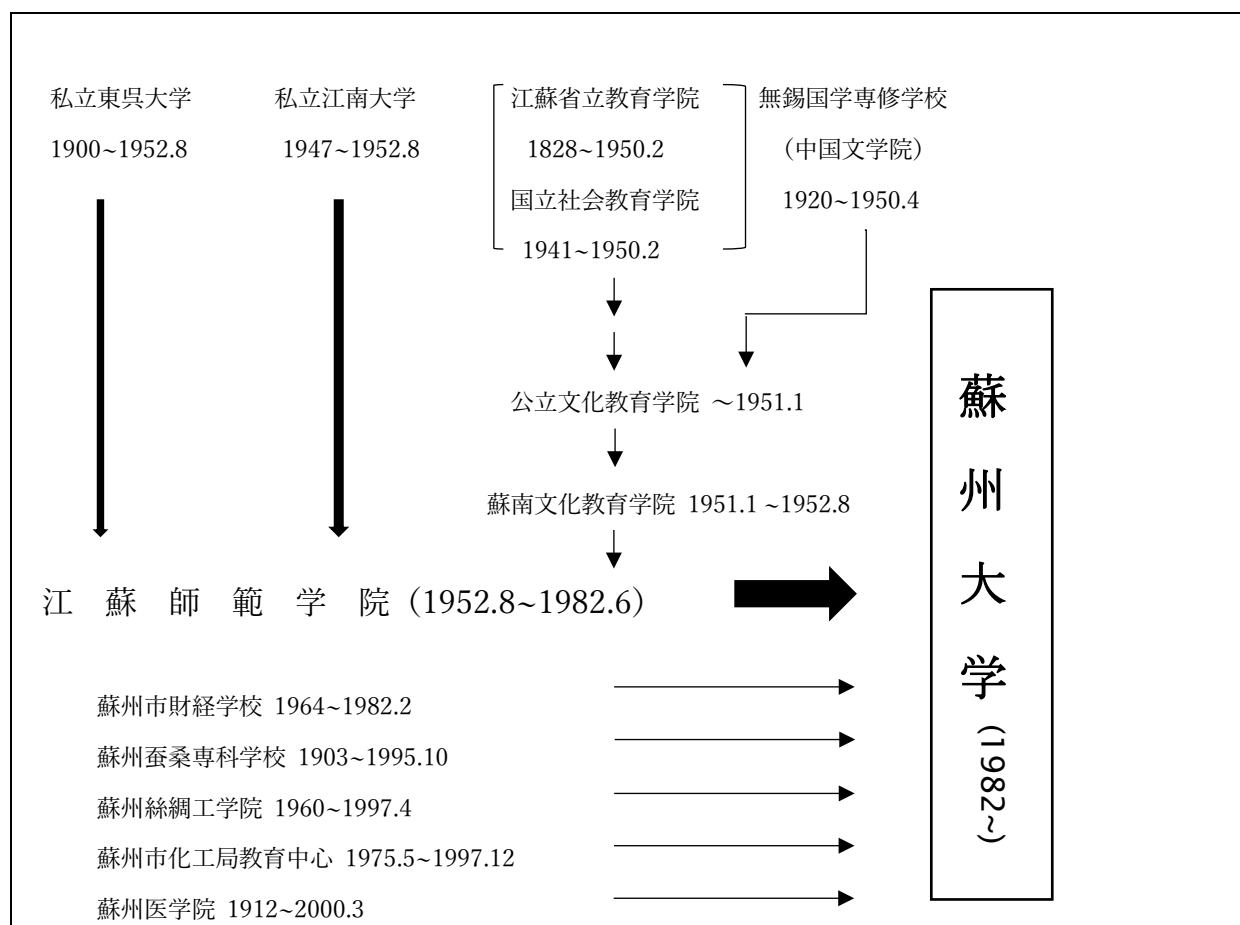


★二つの Soochow University

詳しい経緯は少しややこしいが、以下の通りである。

蘇州市の東呉大学は、1952 年にいくつかの学校と合併して江蘇師範学院となり、蘇州から東呉大学がなくなった。一方、台湾では、1951 年ごろから東呉大学の復校運動が起こり、1954 年、台北市に東呉大学 **Soochow University** が再建された。その後、蘇州市の江蘇師範学院は、1982 年にいくつかの学校と合併して蘇州大学と改名した。そして、2000 年の 100 周年を機に、英文名を **Soochow University** にした。中国語の表記音を使うなら、蘇州大学は **Su Zhou University** であるが、国際化時代を見据え、外国人にも通じる名称を重視したと窺える。その結果、蘇州市の蘇州大学と台北市の東呉大学は、両大学とも **Soochow University** となった。根っこを同じとする両校では、現在、教職員、学生の相互訪問などの交流が行われている。関学は、蘇州大学とも台湾の東呉大学とも交流協定を結んでいる。

東呉大学から蘇州大学までの沿革



2017『蘇州大学年鑑』に基づき、筆者作成

◆その後の話①◆

ノラとパーク博士の一人娘マルガリータ（最終頁の写真の赤ん坊）は、父と同じ南メソヂスト監督教会宣教師 D. L. シェレルツ（中国名：許安之）と結婚し、1950 年まで中国で伝道活動に従事しました。二人は 5 人の子どもに恵まれました。その末娘シェリーがアメリカで結婚した鳥類学者ドナルド・メッサースミスは、中国での野鳥調査に大変興味を抱いていました。1980 年代に南京師範学校で行われた懇親会の席で、ドナルドは自分の妻が蘇州生まれであることを話しました。すると、その場にいた動物学科の全員が「私たちも蘇州の生まれです！」と答えました。しかも、蘇州大学で、シェリーの父親から英語を学んでいたのです。

【学院史編纂室】

◆その後の話②◆

協定締結（1990 年 11 月）の翌年夏、第 3 回目となる関西学院大学中国語研修が初めて蘇州大学で実施され、文・社・法・経・商の学生 18 名と職員 2 名が参加しました。引率は、中島洋一文学部教授と春木紳輔国際交流課職員でした。

【学院史編纂室】

★東呉大学のスクールモットーの日本語解釈

台北の東呉大学でも、蘇州の蘇州大学でも、スクールモットーは、旧東呉大学時代の「養天地正気 法古今完人」である。このモットーは、1929年に初代中国人学長の楊永清が、元の“**Unto a Full Grown Man**”という英語を中国語に表したものだそうだ。中国語の方を解釈すると、「養」は、養う、修養する、育成するといった意味、「天地」は、天と地、世界といった意味であるが、天国、神、キリストとも解釈できる。「正気」は、公明正大な態度、正しい気風といった意味、精神とも解釈できる。「法」は、まねる、ならう、模倣するといった意味、「古今」は、古今、昔から今に至るまでの間。「完人」は、欠点のない人、完璧な人といった意味、人格者とも解釈できる。つまり、「世界の公明正大な態度を養い、古今の完璧な人を手本とする」といった意味と思われる。台湾の東呉大学ホームページには“**Nourish the spirit of universal morality and emulate the perfect men of all ages.**”と訳されている。一方、元の英文“**Unto a Full Grown Man**”は、当時のキリスト教伝道の背景を考えると、「キリスト教の博愛の精神を養い、成熟した人へ」と解釈できる。それはまた、関西学院のスクールモットー“**Mastery for Service**”（奉仕のための練達）や校章の新月（満ちてゆく月）に隠された意味と同じと考えられる。

★東呉大学の創立者たちと歴史建造物

＜時計台、中央芝生周辺＞

時計台の正面入口には、初代理事長 **Young J. Allen** と中国人初代学長楊永清の銅像が置かれている。初代学長 **David L. Anderson** は、時計台の前の中央芝生の東側に銅像がある。中国人初代学長は、第4代である。関学の日本人院長は2代目の吉岡美国であったことから考えると、中国社会では学校運営が軌道にのるのが難しかったことが窺われる。

同じ東側の中央に、浙江省出身の曾子実（英語名：**Charley Marshall**）の銅像がある。この人は、東呉大学のキャンパスとなる場所に小学校を開設した。その小学校をランバスが「存養書院」と命名した。その後、ランバスが建てた病院の経営と医療にも尽力した人である。「存養書院」は、東呉大学の最も古い前身であり、初代校長は **A. P. Parker** であった。

時計台と同じく、最も古い建物が数学楼で、中央芝生の西側にある。

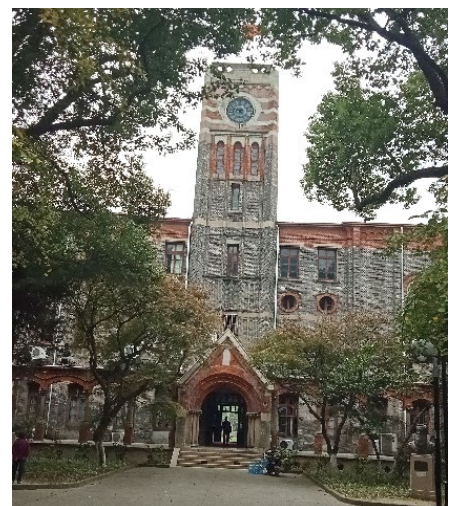


A.P. Parker
存養書院校長
中国名：潘慎文
1850～1924

初秋の中央芝生



左：数学楼
右：時計台





Young J. Allen
東吳大学初代理事長
中国名：林樂知
1836～1907



David L. Anderson
東吳大学初代学長
中国名：孫樂文
1850～1911



曹子実
東吳大学創立者の一人
英語名：Charley Marshall
1848～1902



楊永清
東吳大学第4代学長
(中国人初代学長)
1891～1956

<外国人住宅>

旧東吳大学の正門は、時計台からまっすぐに伸びる道路の先にあり、スクールモットーの漢字が門の二つの柱に刻まれ、門には横に「人民に奉仕する」と書かれてある。表に回ると、東吳大学という文字がある。門の下には狛犬があり、民国37年と書かれてある【写真4頁】。門は、戦後1951年に再建されたものということである。

その周りに外国人住宅が散在し、外国語学院の建物として使われている。その一つ、夏潤楼は日本語学部で活用され、私が通っている建物である。2階には研究室、会議室があり、3階は屋根裏部屋で、畳を敷き詰めた茶室がある。夏潤楼は、関学の外国人住宅1号館と似通っている。ちなみに1階、2階のトイレは、TOTOのウォシュレットが整備されている。夏潤楼の真向かいに、红楼と呼ばれる要人を接遇する会議室がある。同じく、元外国人住宅である。



左：旧外国人宣教師住宅「夏潤楼」

右：旧外国人宣教師住宅「红楼」

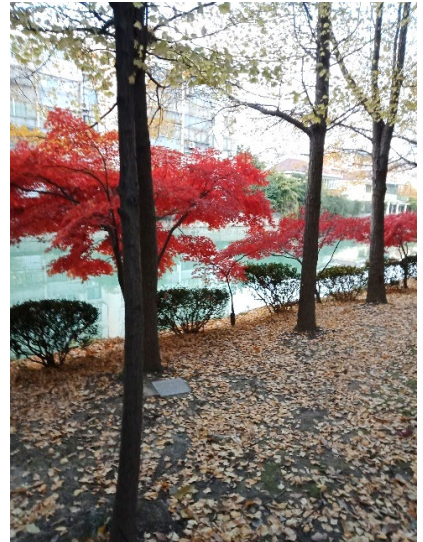
★蘇州大学のシンボル「文星閣」

蘇州大学のシンボルとなっている古い塔がある。1541年に建てられた鐘楼で、現在のものは1752年に再建されたものである。旧東吳大学の正門から約300メートル離れたところ、学生食堂の向かいあたりにそびえ立っている。260年あまりの歳月を重ねている。ランパスが中国に滞在していた時には既に存在し、鐘の音で時計台とともに時刻を知らせていたことと思われる。



★蘇州市の運河と「健康舗道」

蘇州市の市街地は、城壁と運河で囲まれた長方形の街である。その周囲は、横約 3.5 キロ、縦約 4 キロで、一周およそ 15 キロである。その周囲は、「健康舗道」として整備されている。向こう岸との間にいくつもの橋がかけられ、周遊コースには季節ごとに違った草花が植えられており、秋には銀杏や紅葉が美しい。市民から愛されていて、ウォーキングやジョギングのコースとしても最高である。筆者も、滞在中ここを走るのが楽しみの一つである。蘇州大学も、多くの世界遺産も、この内側にある。



蘇州運河と橋

「健康舗道」の秋



関学と蘇州大学の関係調べていくうちに、蘇州大学と交流協定を結んだ当時の関学の方々の多くはおられなくなっていることに気づいた。大変懐かしく思われる。繰り返しになるが、東呉大学創立に最も深く関わったランバスの妹ノラとパーク博士夫妻の末裔は、英語教員として長年蘇州大学で教鞭をとり、今も蘇州大学と連絡を保っていると聞く。蘇州市の蘇州大学と台北市の東呉大学は、ランバス一家とその関係者によってつくられた建学の精神、スクールモットー、建物とともに今後も歩んで行くことを願っている。

【蘇州大学外国語学院訪問教員、元国際連携機構事務部長】



蘇州大学外国語学院訪問教員として澤谷さんが取り組まれた成果の一部は、『日本語論文の書き方ハンドブック 書くために何をどう考えるか』（2020年5月1日）にまとめられています。

神戸のランバス一家、1890年

前列中央：両親

左：蘇州から訪問中の妹ノラ夫妻

夫妻の一人娘（赤ん坊）のその後については、5頁下をご覧ください。

中央：本人ウォルターと妻デージー

右：弟ロバート夫妻

【学院史編纂室】

『学院史編纂室便り』第52号（2020年10月15日）

関西学院大学 学院史編纂室 〒662-8501 西宮市上ケ原1-1-155

TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<http://museum.kwansei.ac.jp/archives/>

「日本のアンデルセン ～久留島武彦～」展示中（大学博物館2階、学院史編纂室コーナー）